

MMPG介護塾

経営診断のプロが アドバイス 第152回

MMPG会員紹介 株式会社佐々木総研
代表取締役 佐々木 大
福岡県北九州市。1986年設立。医
療・福祉・介護を中心に、地域に
根差したワンストップのコンサル
ティングに定評がある。



筆者紹介(長 幸美)
福岡県出身。2015年株式会社
佐々木総研入社。経営コンサルテ
ィング部経営支援課、シニアコン
サルタント。20年の病院勤務経験
を活かした医療・介護にまつわる
様々な相談に従事。

株式会社佐々木総研 長 幸美(ちよう ゆきみ)

医療が変われば、介護が変わる その②

高齢者の多くは何らかの体の不調を訴え、腰や足が痛いといえは整形外科に、高血圧や糖尿病等の生活習慣病では内科に、その他、歯科や眼科、耳鼻咽喉科にと、さまざまな診療を受けています。また、85歳以上の高齢者のうち2人に1人は認知症になるとも言われており、十分に内服薬を服用できず、治療を中断してしまふ場合もあるようです。そんな高齢者が地域の「暮らし続ける」ためには、地域の中で医療と介護がどのように連携すればよいのでしょうか。

「暮らし続けられる」連携を

治療が必要でしたが、徐々に物忘れが生じ、ご自身の服薬ができなくなりまし
た。奥さんが毎食後の投薬
管理を行っていましたが、
奥さんも胃に不調を訴え、
かかりつけ医を受診したと
ころ、胃がんが見つかり、
手術のため急性期病院へ3
週間ほど入院することに。
その間、ご主人は別の病院
が運営するショートステイ
を利用することになりました。
奥さんの手術は無事成
功しましたが、ご主人はシ
ョートステイ先で認知症が
進行。投薬量が増え、さら
には、転倒、骨折し手術を
受けました。骨折により体
も思うように動かせなくな
り、在宅医療と介護を必要
とする状態でしたが、かか
りつけ医は「在宅医療を行
わない」方針であったため、
奥さんの退院後も自宅で一
緒に生活することは困難で
あると判断。結果、施設を
転々とされ、自宅で夫婦一
緒に生活することはなかつ
たそうです。「たられば」
の話になりますが、もしも、
ショートステイ先の病院で
ご主人に寄り添うことが出
来たら、向精神薬の投薬を
行わずに済んだら、かかり
つけ医が「在宅医療」を考
えてくれたならば、ご主人
はもっと自分らしく余生を
過ごすことが出来たかもし
れません。

Aさんご夫婦と同じよう
に認知症を患っているご主
人とその奥さんが、ともに
入院が必要となったケース
では、お二人揃って同じ病
院の地域包括ケア病床に入
院しました。この病院では、
地域連携室の看護師とリハ
ビリのセラピストが入院前
からサポートのあり方につ
いて面談を重ね、看護師や
社会福祉士等が退院後の生
活に向けてカンファレンス
を行うなど、とても親身に
支援してくださいました。
同じ病院であったため、日
中も一緒に過ごす時間があ
り、ご主人の不穏や認知症
もあまり進行することはあ
りませんでした。また、地
域に開かれた病院であった
ためかかりつけ医が入院中
に見舞いにくることもあっ
たそうです。介護サービス
や福祉サービスについても
紹介・提案してもらい、ご
夫婦揃ってご自宅に帰るこ
とができました。

今回の診療報酬改定の中
でも、専門職がその専門性
を活かし、「いかに生活を
支えるか」ということに視
点が置かれています。20
25年を見据えて地域の中
でどのようなことが求めら
れているのかを考えていき
ましよう。(株式会社佐々
木総研/長幸美)